

患者の QOL 向上を目的としたギャラリーの運用

安居 剛¹、相澤 勝健²、加藤 充子²、星野 晴彦²、美原 盤³

(公財)脳血管研究所附属美原記念病院 画像診断科¹、地域連携室²、院長³

[はじめに]医療の目的は、単に病気を治療することだけではなく、患者の QOL (Quality Of Life) を高めることにもある。当院では、平成 12 年より脳卒中および神経難病の患者に生きがいを持ってもらうこと、すなわち QOL の向上を目的として、患者が創作した様々な作品を展示できる院内ギャラリーを設けている。今回、当院におけるギャラリーの運用について報告する。

[ギャラリー概要]平成 12 年、新病院開設時に、来院者が誰でも立ち寄れるように正面玄関入口に隣接してギャラリーを設置した。出展者は、脳卒中後遺症、神経難病で当院を利用している患者を主としている。病院スタッフが、外来受診時や入院中、患者との対話の中で作品を創作しているという情報が得られた時、ギャラリーで個展開催を勧めている。また、一度展示した方には再度の出品も依頼している。展示作業は広報委員が担当し、作品展示期間は 1~2 ヶ月間となっている。平成 25 年度より記帳ノートの代わりに意見箱を設け、回収された意見や感想は広報委員会で取りまとめ、出展者にお渡ししている。

[ギャラリー実績]開催回数は、平成 12 年 4 月~平成 25 年 12 月の 13 年間で 105 回 (平均 7.5 回/年)。出展者数は 50 人 (脳卒中 37%、神経難病 33%、その他疾患 2%、患者家族 9%、地域・病院関係者 17%)。そのうち 18 人が複数回の作品展を開催している。展示作品は絵画、写真、書道、切り絵、油絵など多岐にわたる。意見箱に寄せられる意見は、1 回の作品展につき約 10 枚で、ほとんどが作品を賞賛するもの、そして同じ疾患の患者で勇気をもったというものであった。

[おわりに]障害を持った患者の個展開催のために病院のギャラリーを開放するという試みは、患者本人の生きがいに繋がり、作品を見た同じ疾患の患者にとっても励みに繋がるものと思われる。